



令和4年度中学校武道授業 (相撲) 指導法研究事業

令和4年度中学校武道授業(相撲)指導法研究事業(主催=日本武道館、日本相撲連盟、日本武道協議会、後援=スポーツ庁、協力=熊本大学教育学部附属中学校)が令和5年2月10日(金)、熊本大学教育学部附属中学校にて研究者8名、連盟事務局1名が出席して実施された。

本研究事業は、完全実施された中学校武道必修化の充実に向け、新学習指導要領に準拠し、年間8~10時間の授業時間想定で、各武道種目の特性を踏まえた指導計画、指導内容、指導法、評価等について、教育効果の上がる武道授業(相撲)指導法の研究会を実施するものである。

はじめに小会議室で開講式を行い、主催者として安井和男日本相撲連盟専務理事と沢登英徳日本武道館振興課副主事が挨拶を述べた。

開講式終了後、体育館に移動し、授業視察を行った。今回、視察を行うのは2学年で6時間実施の相撲授業のうちの4時間目に当たり、「相手を押すことについて考える」をテーマに展開された。

授業開始時には普段体育の授業で行われている号令とは別にぞんきょ ちりちようず蹲踞、塵手水による挨拶が行われた。号令後は、前回の授業の際、生徒同士で撮影した四股の動画を見ながら、これまでの学びを振り返った。

続けて、中腰の構えや腰割・四股、受け身などの相撲の動作を取り入れたウォーミングアップが行われた。



ウォーミングアップの様子

その後、本日の授業内容の説明があり、熊本大学教育学部附属中学校保健・体育科長浦卓也

教諭は「どこをどのように押せば相手を押し出すことができるだろうか」と生徒たちに問いかけた。課題を与えられた生徒たちは仮説を立て、話し合いながら動画を撮影・確認し、検証を行った。検証結果の発表では「構えの姿勢では重心が低い位置にあるから、それを崩すためには、逆に高い位置にある肩を押すのが良いのではないか」「下半身を下から上に押し上げると中腰の構えが崩しやすかった」など様々な意見が出された。

続けて、浦嶋三郎研究者が審判の指導を行い、押し相撲の試合を行った。その際に、長浦教諭は、生徒たちへ「勝ったときの姿勢や試合が終わった後の動作にまでこだわってほしい」と呼びかけた。

その後、本日の授業の振り返りと次回の授業の内容について説明を行い、50分間の授業が終了した。



授業前・後に挨拶として塵手水を行う

休憩を挟んで、授業視察の振り返りを行った。研究者からは、「授業全体が非常に洗練された内容であった。子どもたちが生き生きとしており自主的に課題に取り組んでいく姿勢が印象的であった」、「武道で重要な、『相手を思いやる気持ち』を大事にしていることが伝わる授業だった」、「グループワークで班の名前を相撲部屋に見立てる、試合の際に審判に軍配を持たせるなど大相撲の文化を授業に取り入れることによって生徒の関心がひきつけられていた。大相撲の文化に触れることは『する・見る・支える・知る』という生涯スポーツの考えに繋がるのではないか」、「塵手水を学ぶ内容ではなく、最初の挨拶に組み込むことで連帯感を作り、生徒たちの意識作りができていた。生徒と先生の信頼関係もできており、非常に勉強になった」などの意見が挙げられた。

また、今後の課題としては動機づけや興味を持ってもらうための手段の一つとして大相撲の文化を授業に取り入れていくことや、ICTを利用した具体的な授業案の検討、さらなる安全面への配慮などが挙げられた。

閉講式では安井日本相撲連盟専務理事と、研究者を代表して桑森真介研究者が挨拶を行い、研究事業の全てを終了した。